

2016年度初頭、再び「役教職協働」の思いを強くして

2016年度の始まり、4月1日は、新学長として迎えた2年前と同じく桜が満開で、学長としての初心を思い出させてくれました。新しい顔として、渡邊理事、齋藤監事、小川監事、堀田副学長を迎え、新体制での次なる2年間、全教職員の皆さんと一緒に埼玉大学をより一層輝かせるべく、学長として尽力する気持ちを新たにしました次第です。

国立大学は、法人化後2期12年を経て、この4月から新たな中期目標・中期計画期間をスタートしました。各国立大学は社会変革のエンジンとして、知の創出機能を最大化することが求められます。埼玉大学が第3期に目指す方向については、既に様々なところで述べていますが、皆さんとそれをしっかり共有することがとても重要ですので、ここでも改めて記しておくことにします。

埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化 これは今、埼玉大学が掲げるビジョンです。埼玉大学は、知の府としての基盤強化、埼玉大学としての個性化、この二つを軸として機能強化を進め、より一層輝きを増します。

第1の軸は、知の創造と継承をしっかりと据えた、研究と人材育成という知の府としての基盤の強化です。研究力強化については、ライフ・ナノバイオ領域、グリーン・環境領域、感性認知支援領域からなる戦略的研究部門とURAオフィスによる、研究の国際展開を可能とする体制を整え、その結果として研究は着実に進み、成果をあげつつあります。人材育成力強化についても、計画を順調に進め、理工学研究科の入学定員を段階的に増やしました。また、2015年には人文社会科学研究科を設置して、国際化に対応できるリーダーの育成基盤の整備を進めるとともに、2016年には実践的に力量ある教員を養成する教職大学院を開始しています。

第2の軸は、首都圏埼玉の活性化中核拠点として、その役割を積極的に担うことによる、埼玉大学としての個性化です。第3期中期目標期間の機能強化の取り組み構想の中、二つの戦略（①イノベーション創出と地域活性を目指した融合科学研究・開発の推進と人材育成、②地域ニーズに則した人材育成と教員養成）のもと、様々な取組を推進します。2016年には、先端産業国際ラボを設置して、共創型ワークショップや先端産業インキュベーションを実現、製品化や事業化を見据えた産官学金連携による研究開発を進めるとともに、統合キャリアセンターSUを設置して、学生のキャリア形成を一貫して支援する体制を構築、地域志向科目や官産学コラボインターンシップ等を、地域との連携により実施していきます。

文系・理系・教員養成系の5学部全てが首都圏埼玉にある1キャンパスに集まり、日本人学生、留学生、社会人学生といった多様な学生が集う利点を活かして、「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉」のフレーズの下、学問や学生の多様性を柔軟

に受容しつつ、シナジーをもたらす「多様性と融合の具現化」をビジョンとして改革を進めていきます。

財政問題 学長に就任した2年前には、財政基盤として重要な運営費交付金の重点配分の獲得が課題と述べました。この2年間に種々チャレンジし、一定程度の評価を受けて運営費交付金のプラス分を獲得してきたものの、今年度から、機能強化係数に基づく競争原理の導入など、国立大学全体への運営費交付金の配分の考え方が大きく変わり、今後の全体額のさらなる減額の可能性も否定できません。したがって、埼玉大学の財政基盤の安定化には、上述の機能強化を着実に進め、競争的運営費交付金を獲得するとともに、支出を合理的に抑制していかざるを得ない状況です。

このため、昨年度から、収支シミュレーション結果に基づいた検討を続けています。一つには、大学の予算編成・執行・管理を全学的に一本化する「財務の一元化」を図り、予算・決算の構造を全学的に可視化して、より無駄のないものにする全学予算委員会を立ち上げています。これにより、今年度予算の全学的編成を3月中に終えることができました。もう一つは、最も重い課題である人件費の削減についてです。さまざまな人件費削減策を施した上でのことですが、教員、職員ともに、第3期中期目標期間中、約5%の定員削減計画の策定を余儀なくされています。ただし、単に定員削減をしたのでは、教育研究に支障を生じかねませんので、様々な工夫が必要です。それが、上述の「財務の一元化」であったり、「学務の一元化」に向けた学事センターの設置であったりします。また、融合科学研究科の設置など、全学横断的な取組も増えます。縦割りを超えた「協働」による業務の合理化・効率化を実現しなくてはなりません。

役教職協働への思い、再び そのためには、ありふれた言葉ですが、チームワークが重要です。お互いの信頼関係のもと、役員、教員、職員の役割分担を明確にして、教職員に役員を加えた「役教職協働」により横のつながりをもたらしたいとの思いを再び強くしています。つまり、役教職員の一人一人の意欲と能力を最大限に引き出していきたい、そのための仕組みをしっかりと構築したいと考えています。今までの良いところは維持しつつも、大学を取り巻く状況の変化に対応して変えていくという柔軟性と受容性が不可欠です。

2015年、役員も、教員も、職員も、学生も、そして同窓生も、全員が、本学卒業生、梶田隆章さんのノーベル物理学賞受賞という快挙を大変嬉しく思い、埼玉大学を誇りに思いました。埼玉大学はこれからも、構成員が「より良い埼玉大学に」という目標を同じく、一丸となって協働し、質の高い教育、研究、社会貢献に誇りを持って取り組んでいきます。皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

学 長 山口宏樹